

創成期の『英語青年』

— *Japan Times*との関連を中心に—

松 永 智 子

The Root of *The Rising Generation* :
Focusing on the Relationship with *Japan Times*

Tomoko MATSUNAGA

1. はじめに

2009年3月、1898年創刊の英語・英文学研究雑誌『英語青年』（研究社発行）が通算1921号をもって休刊を宣言し、110年の歴史に幕を下ろした。休刊を伝える新聞記事では、「英語独学の専門誌としてスタートし、戦時中も発行を続けた。（略）大学の英語・英文学の研究室の大半が購読し、『英語青年』に論文が載ることが権威だった時期もあるが、大学の学部再編の流れで英文科が減ったことなどから、最近の実売部数は3千部程度になっていた」と報じられている¹⁾。学会情報や一部の連載は『Web英語青年』としてインターネット上で継続されているが、権威ある雑誌の休刊は、大きな反響を呼んだ。就中、かつての「英語青年」たちの惜別の声は顕著である。新聞の歌壇欄に「『英語青年』休刊の記事切り抜きて書斎に入りぬ黙して夫は²⁾」という歌が掲載され、投稿欄でも、「『英語青年』だけは続いてほしかった」と、戦後の紙面で活躍した英文学者たちが学生時代の思い出とともに回顧されている³⁾。彼らの証言からは、『英語青年』が英文学という教養の表象として捉えられていることがわかる。しかし、雑誌『英語青年』が英語・英文学研究の学術誌として認知され出したのは、1951年から英語学者の外山滋比古氏が編集を担当するようになってからであり、そもそも、創刊時の『英語青年』（当時は『青年』）は英字新聞ジャパントタイムス社から発行され、記事・論説中心のジャーナリズムを起源とする英語学習誌であった⁴⁾。その後、『英語青年』はジャパントタイムス社から英語青年社、そして研究社へと発行所を移行していったが、雑誌の性格も、学習誌から研究誌へと緩やかに変化していった。休刊直前の主な購読先が大学の英語・英文学研究室であったように、アカデミックな印象の強い現代の『英語青年』からは想像しがたいが、創刊時は時事英語を中心とした実用的な英語力の涵養に力点が置かれていた。しかも、戦後も『英語青年』の看板として人気を博していた英作文欄はすでに創刊当初から存在し、その添削を担当していたのは、ジャーナリスト出身の英文ライターたちであったことは注目に値する。『英語青年』は「教養」よりも「実用」、「読む」よりも「書く」ことを重視した雑誌だったのである。『英語青年』がその歴史にピリオドを打ち、英語・英文学研究よりも実用的なコミュニケーション能力に関心が集まりがちな現代において、「実地活用の英語」を謳った創刊当時の『英語青年』を振り返る意義は大きい。110年前の同誌は、どのような「英語青年」を期待し、編集されていたのだろうか。

そこで本稿は、ジャパントイムス社から創刊され、坪内逍遙の薫陶を受けた在野の英学者・喜安璉太郎（1876～1955）が実質的に編集を担当するまでの『英語青年』（1898～1904年：1～10巻、創刊当時は『青年』）を対象にそのメディアの特徴を考察し、同誌の読者である「英語青年」像のスケッチを試みる。考察に際しては、特にジャパントイムスとの関わりに注目する。福原麟太郎によれば日清戦争から日露戦争までのこの10年は「英学の黄金時代」であり、多くの新聞雑誌に英文欄が設けられていた英文ジャーナリズムの時代であった⁵⁾。そしてこれ以後、英学は衰退し英文学の時代へと移行するが、英語雑誌の代表格であった初期の『英語青年』はまさにこの転換を反映しているともいえる。初期10巻の考察に「変化」を期待するのはこのためである。英語を取り巻く当時の社会的状況にも注意しながら検討したい。

『英語青年』は記録性に富むため、英文学研究の素材として広く扱われているが⁶⁾、雑誌そのものに関しては、創刊100周年記念号が研究に有用である⁷⁾。また、英語雑誌史のなかでは必ず言及され、藤井啓一（1953＝1985）や大村喜吉ら（1980）の研究が他誌との比較の上で参考になる⁸⁾。大村（1980）は、名編集者・喜安璉太郎を軸に『英語青年』を四つの時代に区分しており、本稿で扱う10巻までは、その第一期（前・喜安時代）にあたる⁹⁾。尚、第14巻第1号（1905年）以降『英語青年』の名が定着するまで、同誌の日本語タイトルは『青年』と『英語青年』とが併用されているが、便宜上、本稿では『英語青年』に統一して表記する。

2. ジャパントイムス社からの創刊：内地雑居への対策として

2-1. 創刊の目的と背景

1898年4月15日、英語雑誌『青年（The Rising Generation）』は前年に創立した日本人経営による英字新聞・ジャパントイムス社より創刊された。同社の助筆・武信由太郎の発意により、編集を翻訳係勝俣吉郎、印刷を営業部長中西美重蔵が担当した。勝俣氏が「この雑誌はタイムスの学生版として出されたもの」と振り返るように、創刊号はほとんど*Japan Times*からの転用記事で注釈はなく、英字新聞のダイジェスト版という体をなしていた¹⁰⁾。菊半截版で64頁、一部6銭の定期刊行物は創刊の辞（A Word of Introduction to the Public）を以下のように語っている¹¹⁾。

この質素な雑誌を発刊するに当たり、われわれの目指す第一の目標は、言うまでもなく、英語のいっそうの普及を促すことである。この国際言語を学ぶことの重要性というよりむしろ絶対的必要性が今やあまねく受け容れられつつあるのだから、そのことに特に言及する必要はないと思われる。（中略）われわれはこの言語を、われわれ自身の知識と知性の増大向上のために、われわれの国家的繁栄と進展のために学ぶのである。（中略）たとえば生かじりの英語ですらも、職業によってはそれを知っている者に莫大な利便と価値をもたらさう。（中略）われわれには条約改正の発効と混合居住の許可によって、この国へ大量の外国人が流れ込んでくるとは思われない。しかし、混合居住であろうとなかろうと、外国人が大量に来ようと来まいと、野心や野望などではなく、皇室と国家に仕えたいという欲求を少しでも抱いている若者たちに、英語学習に最大限の関心を払うことの重要性を

何にもまして強調したい。

「国際言語」である英語を「国民」として学ぶ意義が説かれている。「われわれの利益」が強調されるのは、居留地外国人の内地雑居実施を翌年に控え、「外国人の方が日本語を学ぶべきであり、日本人が外国語を学ぼうとするのは卑屈な奴隷根性だ」と主張する一部の論者たちによる外国語学習消極論への戒めであった。『英語青年』は彼らを「日本語と外国語の相対的な重要度と価値の違いが分かっていない」と諷めている。英語の重要性は、日本語の貧弱性と表裏一体であった。「日本語の知識は日本という限られた地域においてのみ有用であるが、他所では全く無益である¹²⁾。」

『英語青年』に限らず、内地雑居を意識し国民への「実地的な英語 (Practical English)」の普及をはかる声は高まっていた。青年時代をアメリカで過ごし、1879年に帰国して以後は東京外国語大学で校長を務めるなど英語教育の重鎮として活躍した神田乃武 (1857～1923) もまた、雑誌『太陽』(1896年)の英文欄において英語の実地的な知識 (Practical English) の重要性を強調している。「戦争には勝ったが、これからは商業戦に勝たねばならぬ。外国語学習はその有力な武器の一つである¹³⁾。」英語力は貿易の鍵として捉えられ、資本の国際競争に負けぬよう英語を学べと、警鐘が鳴らされた。「日本は今や外国人と隣り合わせに住む時代になっており、外国との商取り引きはますます盛んになっているから、我々は英語で自分の意見を発信することがいっそう必要になっている¹⁴⁾。」

このような時代精神のなか、『英語青年』は英語の習得と国家高揚とを結合させることで、若者たちに英語学習の動機を焚きつけたともいえる。英文テキストの提供はもちろん、「志」の教授こそ重要であった。『英語青年』の発起人である武信由三郎 (1863～1930) 自身、まさに「英文報国」の志を体現した人物である¹⁵⁾。ジャパントイムス創刊者・頭本元貞 (1863～1943) とは鳥取県出身の「竹馬の友」であり、ともに札幌農学校で学び、それぞれ「英語で日本を世界に伝える」ことを生業とした¹⁶⁾。武信も編集に携わっていた頭本のジャパントイムス事業は、半官半民の対外宣伝機関である¹⁷⁾。本社から創刊された『英語青年』とのかわりはいかなるものであったのだろうか。次節では、ジャパントイムスとの関わりを中心に『英語青年』のメディア特性について考察する。

2-2. ジャパントイムス社との関係

『英語青年』はジャパントイムス社内に「英語青年社」を設けて創刊されたが、その翌年には武信の自宅に移行され、社から完全に独立する¹⁸⁾。関係者たちの回顧録によれば、両者は社員や会社を共有しつつも、経営の面では初めから独立した事業だったことが伺える。以下は武信の言葉である。「ジャパントイムス社では創めはしたが社の経営ではなかった。其際同社の記者たりし勝俣詮吉郎氏の助力を以て小生が創立したのであった¹⁹⁾。」

「独立」せざるを得なかったのは、Japan Timesの売上が不安定であったため、社に副業を営む余裕がなかったからである。ジャパントイムス主筆の頭本元貞は、武信の事業について以下のように振り返っている。「『英語青年』は武信君が一人で計画した。私共は寧ろ之に不

賛成を唱えた。発刊後にも寧ろこれを廃刊することを湏めた。それは経済上の困難を顧慮したからである。然るに武信君は何と言つても之に応じなかった²⁰⁾。」

また、武信の片腕として編集に従事した勝俣詮吉郎によれば、『英語青年』『ジャパントイムス学生版』である発刊にはジャパントイムスの経営戦略として期待されていた一方、結果的には『英語青年』の収益自体に厳しいものがあつた。「財政上恵まれていない社の収入のたしにしようという考で始められたものであるが、その成績が餘り芳しくないで、二三號でもう後を社で続けていく勇気がなく、武信氏の事業となり、自分は助け役を務めたのである²¹⁾。」

『日本英学新誌』(1892-1901)、『中外英字新聞』(1894-1923)と並ぶ明治の代表雑誌とされながらも、初期『英語青年』の経営は極めて苦しい状況にあつた。ここで同誌の販売方法をはじめ、雑誌経営について考察を加えたい。同誌は郵送による定期購読を原則とし、第4巻第4号(1900年)から第三種郵便物として認可されたが、投稿記事からは『英語青年』らの英語雑誌が大阪の店頭(the news-vendor's shop)にも並んでいたことがわかる²²⁾。一部8銭(創刊号～第2巻第4号)という価格は他の英語雑誌と比較して大差はなく、印刷部数は約500部からのスタートだった²³⁾。また、勝俣(1948)は、ジャパントイムスの印刷所を利用していた「ライオン歯磨」からの収益が創刊当時の社の経営を支えていたと回想する²⁴⁾。実際、初期の『英語青年』には毎号にわたって「ライオン歯磨」の広告が掲載されている。広告収入から紙面構成まで、武信や勝俣の思考錯誤は続けられた。以下は創刊10周年記念号における、勝俣

の言葉である。「何しろ売高が二・三百という少数であつて五・六百印刷した雑誌が半分残るというような始末なので手に余して居たのを武信氏が引受け僕は氏を補佐することになり内容も段々と変更しCirculationも漸次に多くなつて来た²⁵⁾。」

実用的な英語の習得を謳った『英語青年』であつたが、明治30年代の日本において、学生たちの「英語」への学習目的は変容し始め、同誌はあるべき学習誌をめぐる模索を強いられていた。つまり、条約改正と内地雑居の実施は、『英語青年』等一部の雑誌が期待したほどに実用英語教育の促進に影響を与えなかったのである²⁶⁾。「英語青年」の実態は、「国際社会」日本での活躍を志し語学習得に励む「青年」というよりもむしろ、立身出世を望み上級学校への進学を目指す「受験生」といっても過言ではなかった。

ところで、武信や勝俣が『英語青年』を

(22) THE RISING GENERATION CORONATION NUMBER.

THE GOD OF THUNDER
IS SPREADING FAR AND WIDE THE FAME OF
“**LION**” DENTIFRICE.



Tomijiro Kobayashi,
No. 22, Yanagisawa-gashi, Kanda-ku, Tokyo. TELEPHONE: No. 498, Naniwa Office.
Sold at most Fancy Goods Stores and Apothecaries' Shops throughout Japan.
Agents Wanted. Apply at the HEAD OFFICE in Tokyo.

【図1】『英語青年』における「ライオン歯磨」の広告(CORONATION NUMBER, 1902年)

経営しつつもジャパントイムスの仕事を続けたように、両者は経営を別にしながらも人材面での協力関係を続けた。1897年の創刊以降、勝俣は4年、武信は8年にわたりジャパントイムスに勤務し、逆にジャパントイムスの記者が『英語青年』の編集に携わることも少なくなかった。そしてこの零細な雑誌事業に英文ライターたちが活路を見出したのは、英作文添削という通信教育の試みである。

3. 学習誌としての模索：通信教育の試み

3-1. 「受験生」の拡大と英語の産業化

近代日本の英語史を概説した齊藤兆史（2007）は、明治後半における「英語」の変化を、次のようにまとめている。教育制度が整備されていくにつれ、教育の担い手はお雇い外国人から日本人教師へと変わりつつあった。日英同盟締結の明治35年、ラフガディオ・ハーンが東大を去り、イギリス留学から帰国した夏目漱石が教壇に立つ。遅くとも明治30年代の終わりには英語不問の学問環境が整い、高等教育の条件として英語を学ぶという英語学習の目的は後退した。日本語で講義する日本人講師たちが増加し、良質な翻訳書や日本語による学術書も次第に豊富になっていく。一握りのエリートが英語漬けになって高等教育を受けた明治初期と違い、英語は学習・研究の対象として客体化されたのである。そしてかつての英学は、中等教育レベルでは教科としての英語教育になり、高等教育レベルでは英語・英文学研究へと専門分化していった²⁷⁾。

逆にいえば、明治31年の英語雑誌に求められたのがいわゆる「実用」の媒介としての英語であったことは、英語・英文学の制度化がまだ緒についたばかりであったからである²⁸⁾。また、学習者の増加は英語塾の繁栄や英語雑誌の相次ぐ創刊などの「英語の産業化」をもたらしたが、それは英語が実学的要素を失って学力選抜の基準となり、多くの国民が受験に対応するための英語学習を求めたことを意味していた。「正系」エリートコースであった中学校の進学率は1901（明治34）年から1909（明治42）年度の時点で最低2.8%、最高でも3.8%に過ぎなかったが、乙種実業学校や高等小学校を加えるならば、中学校レベルの学校の在学率は1910（明治43）年には15.9%に達していたのである²⁹⁾。焚きつけられた「青年」たちの英語熱は、「受験生」の勉強熱に吸収されていく。1894年に国民英学会から出版された『実用和文英訳教授書』が版を重ねたが、ここにおける「実用」は受験参考書を意味していた³⁰⁾。

3-2. 英作文添削の開始

受験生を対象とした編集方針の採用は、『英語青年』も例外ではなかった。同誌は英字新聞の抜粋版からスタートし、よりよい学習誌を求め紙面内容を充実させていく。菊版に拡大した第1巻第5号（1898年）からはすでに訳注が登場し、第2巻第2号（1899年）では、「広く学生諸君の投書を仰ぎ細かに之を添削し以て英文を学ぶものの好伴侶たる」ことが宣言され英文投稿欄「Post Card Correspondence」が設けられた。投稿者の原文及び編集者による訂正文が掲載されるこの投稿欄は好評を博し、第2巻第5号では「英作文添削欄」へと発展した。本欄の設置は以下のように説明されている。「山間僻陋ノ英学生ヲシテ座ナガラ英作文添削ノ資料ニ供

センガ為メ今回ヨリ新ニ本欄ヲ設ケタリ³¹⁾。」英作文添削は、遠隔地の学生が「居ながら」にして学ぶための通信教育事業であった。そもそも、郵送式の定期刊行物である同誌自体が、英語の教材として地方の学生たちに重宝された可能性は高い。井上義和（2008）は、明治30年代後半には職業資格試験及び入学試験対策を目的とした私立学校の講義録購読者が爆発的に増大し、「蛍雪メディア」、つまり通信教育という勉強スタイルが確立しつつあったことを指摘している³²⁾。英学界においても、明治20年代以降、「大日本英語学会」（秋元興朝主催）や「国民英学会」（磯辺弥一郎主催）などの講義録が通信教育メディアとして隆盛を極めていた。

ここで重要なのは、英語学習の目的が試験対策と第一義的に考えられるようになったということである。第2巻第6号の社告欄には「今や内地雑居は実地せられ外人との交際は日に頻繁を来し自然英文を要する益々多となるは喋喋言を俟たざるなり。」と実用英語の習得が喧伝されている。しかし、外国人の多い横浜や神戸などの旧居留地ならともかく、「山間僻陬の英学生」が「外人との交際」のための英語を必要としていたとは考えにくい。受験対策需要の拡大に比べれば、内地雑居に伴う実用英語教育の促進は、もはやお題目となりつつあった。『英語青年』は独学者の学習メディアとして機能していたと捉えるのが妥当であろう。少し時代は下るが、こうした『英語青年』の読者像は次の投稿文からも伺える。「小生の如き田舎にあって勉学する者にとって英語青年の如き権威ある雑誌にて勉学の進路を常に明確にして置くことが必要であります、それ故に相当長き以前より愛読しつつあるが真実を申せば寧ろ和文英訳練習の為め購読したと申してもよいのであります。此の練習欄で毎月二回の遠慮なき添削批評は独学者にとって大なる慰藉となるものと存じます。（中野籍一）³³⁾」

上記の文章は、同誌の英作文添削を30年以上も担当した武信由太郎への追悼文として掲載されたものである。英作文欄の設置以来、添削は武信を始め、主にジャパントイムズの英文記者が担当した。『中外英字新聞』（第10巻第2号、1903年、26頁）に掲載された『英語青年』の広告には、この英文添削欄が大きくアピールされている。「此の欄は本社の武信と太田が*Japan Times*社の英人Macalaugh氏と共に担当する所にて購読者は居ながら良教師に就き作文の研究をなすべく他雑誌の敢て企て及ばざる所なり。今後此欄を英作文通信教授欄と改めんとす。」添削サービスは『中外英字新聞』などの他誌にも設けられていたが、英字新聞出身の名スタッフの存在は同誌の権威を高め、発展の道を切り開いていった。「ジャパントイムズ記者」は、他誌との差異化に貢献したのである。英作文欄は第2巻第9号（1899年）より「和文英訳欄」と改称され、翌第10号からは、郵便事情の相違を配慮し、添削課題が東京の部と地方の部に分けられ連載が続いた。

本章では、受験対策としての英語学習需要が高まるなか、『英語青年』が英作文添削欄を設け、通信教育にその活路を見出したことを明らかにした。しかし、「入学試験」にも、正規のエリートコースである中学校から師範学校、士官学校、実業系職業学校まで幅がある。試験対策に励む「英語青年」たちは、どのような進路をたどったのだろうか。次章では、本誌の広告や投稿欄を中心に考察し、初期「英語青年」の実像に迫る。

4. 受験総合誌としての発展

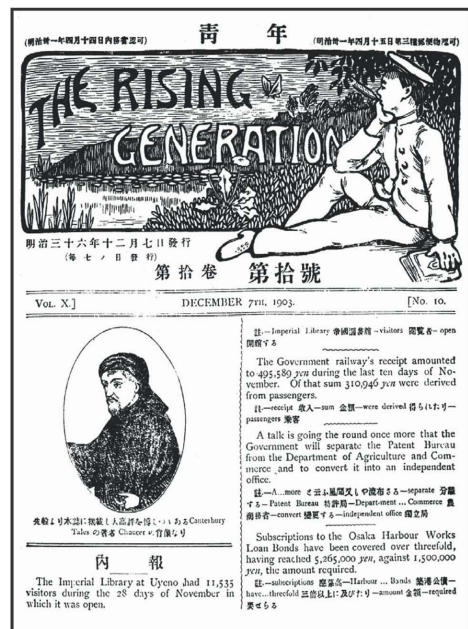
4-1. 多様な「英語青年」たちの交流

第2巻第2号（1899年）に英文投稿欄が新設されて以来、毎号様々な記事が寄せられている。本欄はいわば「自由英作文」であり、故郷の紹介文から英語の学習法、個人の意見・主張に至るまで、「英語青年」たちの「声」が紹介された。投稿者の肩書が想定できる記事も少なくなく、これらを概観すれば、全国津々浦々における「英語青年」たちの存在が浮かびあがる。

第2巻第3号（1899年）には「high school student」と名乗る記事が載せられているが、第4巻第7号（1900年）に「中学欄」が新設されて以降は、中学生からの投稿記事が増加していく。高知（第5巻第2号、1901年）や京都（第5巻第9号）、下野（第5巻第13号）、徳島（第5巻第15号）、田邊（第5巻第16号）、高松（第9巻第13号、1903年）など、地方色も強い。「購読者相互の通信其他総ての便利を計る媒介」とされた「「青年」倶楽部」欄の第4巻第12号（1900年）に「各地方高等学校尋常中学校の英語教科書等の通信あらんことを切望す」とあり、同誌の主な購読者として中学生、高校生が想定されていることがわかる。

一方、男子普通学校以外の「英学生」たちも一定の層を形成している。大阪外国語学校（第5巻第6号、1901年）や徳島師範学校（同上）、大阪工業学校（第5巻第12号）、大阪高等商業学校（第5巻第16号）、大島航海学校（第8巻第12号、1903年）などの学生たちが、各人の思いの丈を表現した。更には、1903年の『中外英字新聞』における紙面広告にて、『英語青年』『中学欄』が「中学程度の男女学生の為に設くるもの」と表されており、「英語青年」に女学生も包摂されていたことは興味深い³⁴⁾。また、この頃になると、和文英訳欄の課題も甲乙種に分けられ、高等生や中学生がそれぞれのレベルに合わせて取り組むことができる構成になっていた。投稿欄には、同志社（第4巻第11号、1900年）や「三高」（第5巻第18号、1901年）の学生の投書も存在している。

つまり、『英語青年』は紙面を階層化することにより、多様な読者層を囲い込もうとしていたのである。したがって自ら表現する権利をも持ちえた「英語青年」たちは、投書欄や添削欄を通して、各人の進路コースを横断した学生たちとも「交流」することができた。第4巻第6号（1900年）の「「青年」倶楽部」には、三重師範学校の学生の投書に対して「師範校の人にしては中々佳し」という編集者評が載っている。投書欄は、全国の「英語青年」たちと切磋琢磨しあう場であったともいえる。一部の学校文化に特化することのない『英語青年』は、英語総合雑誌を目指していた。



【図2】

『青年』表紙における「英語青年」
（第10巻第10号、1903年）

4-2. 名編集者、喜安璣太郎の登場

『英語青年』の発展に死力を尽くした武信だが、『武信和英大辞典』や『The Japan Year Book』の編纂作業で多忙となり、1904年前後から早稲田で知遇を得た英語教師、喜安璣太郎に本誌の編集を任せるようになっていった。喜安璣太郎こそ、『英語青年』の編纂に40年以上も携わり、その権威を不動のものとした名編集者である。第11巻第1号（1904年）より、喜安は編集だけでなく、経営全般にもかかわるようになっていった³⁵⁾。以後、彼は第4巻以降月3回で発行していた同誌を2回に変更し、大学教授陣に寄稿を依頼して誌面を一新させるなど、『英語青年』の改革に積極的に着手する。第12巻第11号（1905年）で「英米の言語文学の研究に貢献する」ことが同誌の目的にかかげられ、英語・英文学研究の記事数も増していったが、喜安は、武信、勝俣の実用的な面を尊重する編集方針を引き継いだ。当然、彼が意識していたのは受験対策のニーズである。しかも、彼の時代には、高等学校や専門学校への入学試験だけではなく、文官任用試験などの職業資格試験までもを対象とするようになっていった。以下は、戦後、喜安の事業を引き継いだ外山滋比古の回想である。「もちろん一般の英語愛好者、英文学を勉強する人たちに有益な雑誌であることを願っておられたのだけれど、ひそかに力を入れていたのがそういう検定試験（中等教育検定試験及び高等教育検定試験—引用者註）に合格するには、この雑誌を読んでもらえば大丈夫という読者だったのでしょ³⁶⁾」。

東京高等師範学校講師	井上十吉
東京高等商業学校教授	石川文吾
早稲田大学講師	今井友二郎
東京高等師範学校教授	岡倉由三郎
眞宗大学教授	大谷正信
ジャパントイムス記者	高橋一知
東京高等商業学校教授	高島捨太
早稲田大学講師	坪内雄藏
学習院教授	南日恒太郎
東京外国語学校教授	村井和至
英詩人	野口米次郎
第一高等学校教授	畔柳郁太郎
外務省翻訳官	齊藤祥三郎
東京高等師範学校講師	佐久間信恭
早稲田実業学校講師	佐藤毅
東京朝日新聞記者	杉村廣太郎

喜安時代、「英語青年」の年齢層は中学生から高校生、大学生へと高まっていったと考えられる。彼は帝大生の卒業論文を掲載するなど徐々にアカデミズムにも接近して、英語・英文学研究誌としての現代の『英語青年』の基盤を形成していった。

【表1】『英語青年』に寄稿した人々：社告「次の諸名家は第十四巻より寄稿を約せられたり」（第13巻第9号、1905年）より作成

おわりに

創刊から『英語青年』に携わった勝俣銓吉郎は、論文「日本英字新聞のおいたち」のなかで、「日本のmission schoolが活用性のある英語の持ち主たる日本人を多数出したが日本の英字新聞は多数の英文の書ける日本人を造り上げた」と指摘する³⁷⁾。この、「英文の書ける日本人」によって築かれたのが創成期の『英語青年』であった。同誌に対するニーズは、近代化の進展

とともに国威発揚の実用英語から立身出世の受験対策へと展開したが、創成期の「英語青年」たちは、この「英作文」共同体として独特の文化を築いていたのである。初期『英語青年』がエリート学生から実業学校の学生までの横断的な媒体であったということは、本稿の少なからぬ発見であった。

また、一部で指摘されているように、『英語青年』の休刊は学部編制や英文学離れの現象としても説明できるが、紙媒体から電子媒体へのメディア史的潮流とも考えられる。1922年の創刊以来、学年別学習雑誌の先駆けとして発展してきた『小学六年生』（小学館発行）も、2010年2・3月合併号をもって休刊した。権威ある雑誌の休刊は『英語青年』以降相次いでいる。更に、国際的には学術誌の電子メディア化も進んでいる。初期の『英語青年』をはじめ、英字新聞や英文欄に教材としての役割が期待されたのは、当時の英語メディアの状況によるものであった。雑誌史も、ラジオやレコードなどのニュー・メディアの登場・普及と関連付けながら論じれば、新たな発見に出会うことが期待できる。近年ますます盛んになりつつある英語学習教材の研究でも、メディア史的な考察が重要になってくるだろう。『英語青年』研究にも、その可能性は開かれている。



【図3】「King Edward Coronation Number」（臨時増刊号、1902年6月27日）の表紙

註

- 1) 朝日新聞（朝刊）（2008年12月16日、21面）
- 2) 朝日新聞（朝刊）（2009年3月2日）
- 3) 朝日新聞（朝刊）「オピニオン2」（2009年3月14日、17面）
- 4) 『別冊英語青年100周年記念号』「年表・『英語青年』100年の歩み」（1998年8月1日、研究社、126－137頁。）
- 5) 福原麟太郎『日本の英語』（研究社、1958年）、39頁。山本武利（「軍需と『日本タイムズ』」『占領期メディア分析』法政大学出版会、1996年）によれば、明治30年ごろの日本では、英字新聞への接触を通して英語力を得たいというニーズが高まっており、比較的知識人読者のウエイトが高い『萬朝報』や『国民新聞』ばかりでなく、『河北新報』のような地方紙までも新聞に英文欄を設けていた。
- 6) 例えば、翻訳をめぐる受容と変容のポリティクスを検討した齋藤一（『帝国日本の英文学』人文書院、2006年）や、明治・大正期の翻訳規範の変遷を考察した佐藤美希（「雑誌『英語青年』に見られる明治・大正の英文学翻訳規範」『Savage:北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集』第三号、2007年、48－59頁）がある。
- 7) 荒木正純「表象としての『英語青年』」（18－20頁。）、出口保夫「英国雑誌と『英語青年』」（24－26頁。）、荒竹三郎・西尾巖・小出二郎・上田和夫「座談会・『英語青年』のしてきたこと」（40－49頁。）などが参考になる。

- 8) 藤井啓一『日本英語雑誌史』(名著普及会、1985年)、大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編『英語教育史資料 第4巻 英語辞書・雑誌史ほか』(東京法令出版、1980年)
- 9) 第一期(創刊～1904年)；喜安が関わる以前、第二期(1904～1944年)；喜安が編集を担当した時期、第三期(1944～1955)；研究社に移り、喜安の影響が続いていた時期、第四期(1955～1980現在)；喜安の影響が薄れて以後。
- 10) 勝俣詮吉郎「『英語青年』の思出」『英語青年』創刊50周年記念号(研究社、1948年4月、44頁。)
- 11) 『青年』創刊号(1898年4月)2～3頁。原文は英語、翻訳は『英語青年100周年記念号』(研究社、1998年、138頁)を参照した。
- 12) 同上
- 13) 神田乃武「English in Middle School」(中学校における英語)『太陽』(第二巻第四号、博文館、1896年、231～234頁。)
- 14) 神田乃武「Must a Japanese given up the idea of ever learning to write English?」(日本人は英作文の学習を諦めるべきか)『太陽』(第一巻第四号、博文館、1895年)
- 15) 勝俣詮吉郎「英文報国(武信氏の業績を憶ふ)」『英語青年』(第63巻第7号、1930年)
- 16) 頭本元貞「嗚呼！武信君」『英語青年』(第58巻第7号、1930年、21頁。)
- 17) 外山敏雄(「英文ジャーナリスト・頭本元貞」『札幌農学校と英語教育』思文閣、1992年、115～116頁)では、福沢諭吉が*Japan Times*に資金を融通したことが確認されている。
- 18) 藤井、前掲書、31頁。
- 19) 武信由太郎「本誌の沿革」『英語青年』(第19巻第1号、1908年、26頁。)
- 20) 頭本、前掲。
- 21) 勝俣、前掲。
- 22) N. G. 「『青年』倶楽部 河内通信」『英語青年』(第4巻第8号、1900年、4頁。)
- 23) 藤井、前掲書、32頁。1903年当時、『中外英字新聞』は一部9銭であった。
- 24) 勝俣、前掲。
- 25) 勝俣詮吉郎「創刊十週年雑感」『英語青年』(第19巻第1号、1908年、27頁。)
- 26) 齋藤、前掲書、18頁。
- 27) 斉藤兆史『日本人と英語』(研究社、2007年、13頁。)
- 28) 荒木正純「表象としての『英語青年』 一日清・日露戦争の狭間で」『別冊英語青年110年記念号』(研究社、1998年、19頁。)
- 29) 江利川春雄『近代日本の英語科教育史』(東信堂、2006年、15頁。)
- 30) 「明治初期の受験参考書」(大村他、前掲書、403頁。)
- 31) 「英作文添削欄を設く」『英語青年』(第2巻第5号、1899年)
- 32) 井上義和「蛍雪メディアの誕生」(『ラーニング・アロン』新曜社、2008年、33頁。)
- 33) 中野籍一「武信先生を悼む」『英語青年』(第63巻第7号、1930年)
- 34) 国民英学会『中外英字新聞』(第10巻第2号、1903年、26頁。)
- 35) 藤井、前掲書、31頁。
- 36) 外山滋比古「私的な『英語青年』史」『別冊英語青年110年記念号』(研究社、1998年、37頁。)
- 37) 勝俣詮吉郎「日本英字新聞のおいたち」『英語青年』(第99巻第9号、1953年、6頁。)